

取手市民のため
「藤井しんご」
の市政改革を
支援します

取手新時代をひらく会 しんご通信 第41号

2014年(平成26年)
1月24日 金曜日
新年号

■発行人 藤井信吾 ■発行責任者 取手新時代をひらく会 石井信光 ■事務所 〒302-0004 取手2-14-24 竹内ビル2階 ■TEL&FAX: 0297-72-5616

年頭の御挨拶

取手市長 藤井信吾



新年あけましておめでとうございます。取手市長に就任して7度目の新年ご挨拶となります。

この間、国内外の経済環境や社会環境が激変する中で、取手市は「持続可能な行政運営への転換」を掲げ、広範な行政課題に果敢に取り組み筋肉質で市民本位の市役所に生まれ変わるよう取り組んできました。同時に、多方面からの産業振興策の展開や中心市街地の活性化を進めるなど魅力ある街づくりにも注力した結果、常総線沿線のゆめみ野地区に大手食品会社の工場が操業を開始し、ゆめみ野駅周辺では住宅建設が進められています。一方、取手駅前については歩行者デッキの姿が見えてくるなど苦勞して蒔いた種が実を結ぶ段階になってきました。

そういう中で、今年の広報とりで新年号で取り上げた新春対談「スマートウェルネスシティ(住民が健康で元気に暮らせる都市)づくりについては、その理念と可能性を市民の皆様にご説明をして、ご理解を得ながら事業を進めてきた1年であったと考えております。

確実に到来する超高齢社会の中で、「街全体が賢く健康であり続ける」ために、どのような準備がいつまでに誰の手によってなされるべきか、これは学問としても大きなテーマですが、市民の皆様の日々の生活の場における行動選択の積み重ねが結果に直結しているという点では、市民と行政との合作事業であると考えております。幸い、東京大学講師陣や久野譜也筑波大学教授をお招きしての市民大学の開設により、先生方からウェルネス・シティ取手の考え方も伝えていただき、たくさんの方々にご心寄せいただけたと思っております。

また、全国市長会が年1回開いている全国都市問題会議が昨年10月に開催されましたが、75回の歴史の中で、はじめて「都市の健康・人・まち・社会の健康づくり」というテーマが設定されたこと、パネルディスカッションのコーディネーターとして、取手市がご指導を頂いている筑波大学の久野譜也教授が進行を務められたこと、スマートウェルネスシティ首長研

究会の仲間である新潟県見附市の久住時男市長が実践の結果を一般報告されるなど、取手市が今進めている方向が間違いなく、最も適切なアプローチであることを確認した次第です。

さて、「食と農」という取り組みでも進展が見られました。新鮮な農産物を市民の皆様にご提供するとともに、健康づくりの一つの拠点としても活用が図られることになっている農産物直売所が4月にオープンします。JA茨城みなみが運営するこの直売所は、JAとりで総合医療センターの近傍に完成します。

今年も嬉しいことがたくさんできる取手市になるよう市民の皆様、取手新時代をひらく会の皆様と一緒に市政を進めますので、よろしくお願い致します。



農産物直売所 4月オープン (写真提供: JA茨城みなみ)

<http://www.fujii-shingo.com>

検索



謹賀新年

藤井しんご後援会 会長 寺田 治

新しい年を迎え皆様のご健康とご多幸を心よりお祈り申し上げます。日頃から取手市長 藤井信吾の政治活動にご支援、ご高配を賜り心から厚く御礼を申し上げます。さて、支援者の皆様方のこの街への思い(期待する、懸念する、改革する、行動する等々)を持ち続ける情熱と行動に支えられて、藤井市政は7年目の春を迎えました。藤井市政の今年第2期の最終年、4年目に入ります。

3年目の昨年は、「ウェルネスプラザを含む取手駅北口土地利用計画がしつかり動き出したこと」、国・県・JRとの連携による「常磐線を跨ぐ3・4・3号線の陸橋工事の開始」、「相野谷川拡幅のための常磐線架橋作業(藤代・取手間川戸川橋梁工事)の本格化」などのインフラ整備も進み、順調に動き始めました。産業振興(食品会社の操業開始、JA茨城みなみの農産物大型直売所の4月オープンなど)の面でも、地道な努力が実を結びました。

市長の方針・施策に対する市議会の皆様と市職員との真摯な議論の推移を見ていると、チェック機構でもある市議会と行政が市長とスクラムを組んで前進しているという印象です。民の活力という意味で、「リボンとりで」のオープンが街に賑わいをもたらしましたし、ウェルネスプラザ構想に呼応する形で、「(仮称)とりでメディカルセンター」も今春には完成・開業の運びになるようです。

藤井市政の第2期4年目の今年には、主要施策の仕上げの時であると同時にスマートウェルネスシティ(住民が健康で元気に暮らせる都市)の総仕上げとしてソフト面でも持続性のある具体策を積み上げ、つぎなる10年への展望を「協働」でゆるぎなく構築していくとまであります。ここまで到達できたのは偏に後援会の皆様はじめ「この街を少しでも住み良くしたい」と願う市民の皆様のご支援のお陰です。

市政の一層の進展を目指す「市民と協働で安心して暮らせるまちづくりを推進する藤井市政」を「取手新時代をひらく会・藤井しんご後援会」は更に支援を強化して行きたいと考えております。改めて、本年もどうぞよろしくお願ひ申し上げます。

ユーバ市訪問紀行

今年の6月に姉妹都市

ユーバ市から訪問団

取手市長 藤井信吾

今回は10月30日から11月8日の日程で、30名の訪問団(生徒21名)が姉妹都市のユーバ市を訪問しました。25周年を記念するイベントとして大歓迎を受けてきました。私にとりましては5年ぶりとなる訪問です。

前回の訪問では現地滞在3日間でのメンバーと分かれて帰国しなければなりませんでしたが、今回は最後まで行動をとることにできました。さらにユーバ市の市長であるバックランド夫妻のお宅にホームステイできたことから、子どもたちとの交流とは別に、私自身もホームステイを通じて密度の高い意見交換ができました。ユーバ市のバックランド市長の前職は警察官ですが、こども時代からあらゆるフィールドワークを経験済で米国人の持つタフで前向きに生きる力がそのまま市長の原動力にもなっている頼もしい人物です。

私の英語力も3日目くらいから回復してきて、今のことどもたちが職業観をきちんと持てないまま学校に入り学業を終える状況について心配していることを話すと、近年米国においてもこどもの学業へのモチベーションが低下していることや、スマホやゲーム中毒といった以前では考えられなかった事態が起きていることなどを話してくれました。

また、折からのオバマケア(医療保険改革)に対する国民間の大きな考え方の相違については、日米におけるペンション(公的年金)や退職時の給付の水準などに話が話が語彙の不足と通貨の換算の煩わしさに苦勞しながらも、共通の課題について少しまとまった意見交換ができました。

英語で話すというハンディはあるにせよ、行政の責任者が赴く以上、語るべきことをきちんと伝え、語られたことをしつかりと受け止めレスポンスをしつかりと返すことが求められています。帰国後、教育委員会を含む市役所幹部と反省の会を持ちましたが、取手市のこと、取手市における教育のことなどを正確にお知らせする英語版の市政要覧を簡易版でよいから作成しようという働きかけたところです。私自身、生命保険会社で駐在員をしていた頃、英語での意思疎通で本当に言わなければならぬことを正確に言えずに、言える範囲の近いところで妥協せざるを得ない不完全さにもどかしさを何度も感じてきました。自分たちの主張すべきことを、知って欲しいことを正確に伝えるという意味から今回は事前に準備を進め意味ある交流ができましたが、もっとと努力が必要だと感じました。

今年の6月には25周年記念イベントとしてユーバ市から訪問団が取手に来られます。ホームステイの受け入れを含めてご協力を宜しくお願い致します。最後に、友好協会はじめ多数の方々からご協力を頂きましたことに心よりお礼を申し上げます。





街中の広場を大いに使いましょう!

藤井市長の年頭挨拶にあるとおり、新しい種が実を結び始めています。完成は少し先ですが、その一部が4月頃から利用できるそうです。最新の情報をイラストなどを使ってご紹介いたします。取手駅前前の回遊機能を持った歩行者デッキ(完成予想図②)と姿を現したデッキ⑥、藤代庁舎前のパフォーマー広場④はこの春から利用できるようになります。写真③は藤井市長の関連施設視察の様子です。そして、スマートウエネス構想が完成すると街中にパース絵のように市民の弾んだ声が聞こえてくるでしょう。

市長には諸事業を進めるにあたっての近況を語っていただき
 取手駅西口の茨城県学生寮跡地(敷地面積5400平方メートル)は、市民の文化芸術活動の場となる多目的ホール及び健康増進を目的とした保健センターやジム、社会教育のための講座室の他、児童が遊びを通してバランス感覚や創造性を培うプレイルーム、子育て相談機能などを備えた複合施設(設計段階)となります。
 一方で、この施設は駅前であり、通勤・通学者、お買い物の方などが目にしているところなので、この建物に約1800平方の公園を併設させ、災害時の防災施設として役立てるとともに、平時には、緑陰で腰を下ろし、休息や交流できる場として整備します。
 この野外空間は野外ステージや屋台の設置も可能な半常



取手・藤代間に架かる陸橋工事、常磐線の東京駅乗り入れも決定!



設型のイベント広場として利用します。広場がパフォーマンスの活動発表や地域住民が主催する大小の祭りなどに活用され、道行く人々の立ち寄り大歓迎ということになってくれれば、使われる広場として、活気源となりましょう①。このような発想から、ウエルネスプラザ一階部分については、建物に入らなくても外部から利用できる屋根と壁に囲まれた空間、公園側からはステージと見立てられるような空間を作る予定です。
 また、藤代庁舎の水と緑と祭りの広場にはご覧のとおり、屋根に覆われ、背面と側面は必要に応じて壁が上げられる常設ステージとして整備します。この春から利用できるようになります④。
 さて、このような都市の中心部における「広場」づくりは、決して、突飛なことではありません。長岡市では、市役所を移転するに際して、アオーレ長岡という市民全体が協働する空間と捉えた設計をしています。行政棟とアリーナ(スポーツ施設)の間に、「ナカドマ」と呼ばれる屋根付きのイベント広場を建設して、市民交流の場として活用しています。また、富山市においては、旧市街地商店街の一角の0.14ヘクタールをランドプラザと称するアーケード付き広場として整備して、音響設備とミスト機能を備えた寛ぎの場として、人の流れを集めることに成功しています③。
 街中につくる新しいコンセプトの広場が賑わい創出につながることを念じています。(藤井信吾)

茨城県経営者協会取手・龍ヶ崎地区支部で 藤井市長が講演(要旨)

昨年の11月28日(木)午後3時30分より、キリンビールのゲストハウスにおいて、茨城県経営者協会取手・龍ヶ崎地区支部の行政懇談会が開催されました。藤井市長は約40名の会員企業の方々に約1時間の講演をされました(写真参照)。

「取手市が取り組む地域産業活性化施策とまちづくり」と題した講演では、取手市の環境変化と重点目標について掘り下げた説明が行われたのち、最新の産業振興戦略とスマートウエルネス政策について語られました。

産業振興策の中では、取手市の「産業振興戦略プラン」を作るため、平成24年に大手企業のみならず市内に事業所を置く複数の業態の個人事業所代表を加えた「取手市まちづくり懇談会」を発足させ、そこでの自由な発言や提案の中から25年12月には、「とりで本舗」という市特産品のインターネットサイトが開設されることが紹介されました。平成26年4月に本郷のJAとりでで総合医療センター脇に設置される農産物直売所の新たな機能のことや(株)カスミと協働で行っている移動スーパーの展開状況などが報告されました。

また、75歳以上の高齢者の人口が現在の1万1千人から2025年には、2万2千人と倍増することが予測される中、「歩いて暮らせるまち」をキーワードとする多世代にわたる健康増進(ウエルネス)政策を根付かせていくことが取手市にとっての緊急の課題であること、さらに高齢者層に社会参加のステージを豊富に提供することによって、高齢者自身の社会貢献を引き出し、住民幸福度の高い「多縁・太縁(たえん)」社会の構築を目指すとする具体的な施策を、市民大学講座などでよりわかりやすく市民に伝えていく様子が語られました。活発な質疑応答で懇親会へと移りました。

幼稚園の保護者・園長さん 藤井市長と懇談会

昨年の11月20日(木)に、取手市幼稚園連合会からの要請により、私立幼稚園の園長さんと約百名の保護者の方々の前で藤井市長が、「取手の子育てと幼稚園教育の未来」について講演をされました。

藤井市長は「就学前の子供たちにとっても保育や幼稚園教育は必要であって、この時期に生きていく基本的な力を身に付けさせることが最も大切です」と話されました。それは「就学・就労の意欲の形成においても、幼稚園におけるダイナミックな体験が不可欠である」との認識からです。

さらに、今の子育て世代が置かれている環境についての市民の皆様への理解と、少子化の中で幼稚園教育の水準を一層向上させるために奮闘している私立幼稚園に対しての行政支援の必要性などが語られ、最後に会場の保護者との自由な意見交換が行われましたが、市長は丁寧に応えておられました。出席者からは有意義な懇談会でしたという声が聞かれました。

※現在、幼稚園教育についての許認可は茨城県が行っていますが、平成27年度に「子ども・子育て支援新制度」がスタートするのに合わせ、その権限が市に移譲されます。現在でも、保護者に対する就園奨励費の支給や各園に対する補助金支給等で、市は幼稚園と関係がありますが、今後、市と私立幼稚園の関係がより密接になってくると考えられます。



愛称「レディス藤の会」 第2回取手地区の集い

平成25年10月8日、藤井市長を囲み取手地区女性支援者の集いが開かれました(通算4回目)。

この日、集まった22名の皆さんの中で、昼休みに訪れた藤井市長から市政報告がありました。関心事の一つは、桑原地区に今春完成予定の農産物大型直売所です。この直売所は新鮮な農産物を供給するだけでなく、複合的健康づくりの役割も担う施設となる予定で、ウォーキングで来る人には休息の場所となり、健康に関する情報も提供できる施設を目指すというものです。新鮮な野菜を使ったレシピの紹介など、市民の生活習慣病予防にも効果が期待されます。楽しみながら健康を作り出すことのできる、近隣にない直売所の完成に「いまからとても楽しみです」との声が聞かれました。このように、人が集える場所をつくることにより、人々の交流が生まれ、その交流がまちに活気を生み出してくれることも大いに期待できます。

もう一つは、現在建設中の西口医療モール地区に0.1才児を対象とした保育施設の拡充が進められていることです。低年齢の子供を安心して預けられる保育所が駅前に出ることに、育児と仕事の両立が多くの人に可能となります。「医療モールという立地を活かして、急な発熱などの病児や、病み上がりの病後児を一時的に預かってくれる保育施設まで拡充してもらえれば働く親にとっても大変ありがたい」という声も聞かれました。「若い世代が子育てしやすいまち取手」の実現に期待します。

編集後記

昨年は巷の暗い風評を払拭したいと思い、しんご通信第38号40号を発行し、それをホームページに公開してきました。編集作業は記事の検証から始まりますが、市政の方向性に間違いはなさそうです。GEHの調査結果(科学新聞)によると、子育て世代の半数以上の人は、親の介護と自分の将来の介護に不安を抱えているそうです。このジレンマを解消する基盤整備が急務だと提言しています。今年も何卒よろしくお願ひ致します。(編集長 井上君夫)